

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて

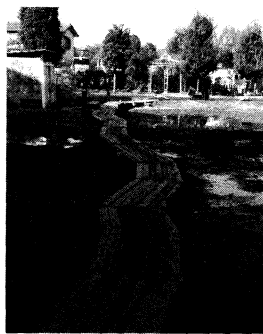
## 川崎市子ども夢パーク

神奈川県川崎市



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第2回目は川崎市子ども夢パーク。「やってみよう」がいっぱいある子どもたちの遊び場を訪ねました。

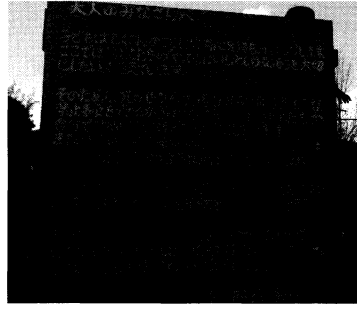


JR南武線津田山駅で下車。地図をたよりに歩く私たちの横を中学生たちが追い越していく。彼らの背中を追いかけていたら『子ども夢パーク』というアーチが見えてきた。アーチをくぐると、その奥に、緩やかな曲線を描く建物が見える。約束の時間より少し早く到着した私たちは、誘われるように中に入ってしまった。

入口を抜けるとそこは広場。前日雨が降ったために、大きな水たまりができています。長く続く板の道を歩いていくと、舞台のようなものがありその隣に、着替え小屋があった。『はいっています』という札がかかっている。遊びの匂い、子どもの匂いがいっぱいで、心がわくわくしてくる。



## ◆子ども夢パークで大切にしていること



大きな看板が見えてきます。そこには『子どもはたくさんのごことに好奇心を持ちチャレンジします。ここでは、子どもたちのやってみようという気持ちを大切にしたいと考えています。そのためにプレーパークでは、遊びを制限するような禁止事項をできるかぎりつけないことで、子どもたちが自分で決めたり、判断できるようにしています』と書いてある。

平成十五年七月にオープンした子ども夢パークは、「川崎市子どもの権利に関する条例」をもとにつくられた施設である。「川崎市子どもの権利に関する条例」とは、「子どもたち一人ひとりが大事にされなければならない」と考えた子どもと大人がた

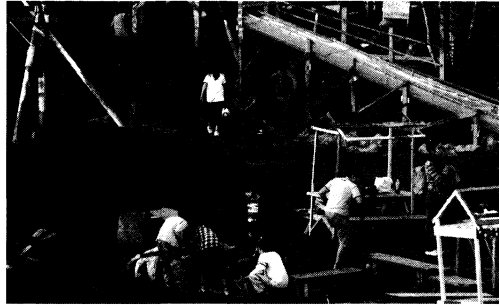
くさん話し合いをして制定されたのだという。子どもと大人がしっかり話し合い、夢を広げ、つくっている場所だということが、看板からも伝わってくる。

## ◆いつも何かが生まれている場所

やぐらにのぼったりターザンロープで遊んだりしていると所長の西野博之さんがやって来て穏やかな笑顔で「いらつしやい」と語りかけられた。広場を歩きながら西野さんのお話を聞いた。

高いやぐらにのぼるための梯子はしごは、意図的に間が抜いてある。「簡単にはのぼれないようにしてあるんだよ」と説明される。次の段にのぼるのはそう簡単ではない。この梯子をのぼることのできる力と勇気のあ  
る人だけが、高い場

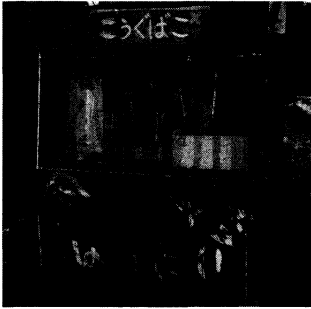




もの手によって作られていたり、作り上げられたりしている。「ここでは、大人の作った遊具で遊ばせるのではなく、作りたいと思った時に必要なものを置いておくようにしている。シャベルや工具も

所に立つことができる。小さい子は途中までのほり、いつか自分も上までのほりたいたと、あこがれをもちながら上を見上げることだろう。夢パークでは「場」の中に大切なメッセージが込められている。

広場にはさまざまな拠点がある。それらは子どもたちの夢によつ



自由に使えるようになっていいる」と言う西野さん。工具置き場にも子どもたちの手が加わっている。「これは最近出来たばかり」と紹介してくれた橋。二人の小学生が作ったという橋はとても頑丈だ。「ここに橋があつたほうがいいよね」と言いだし、

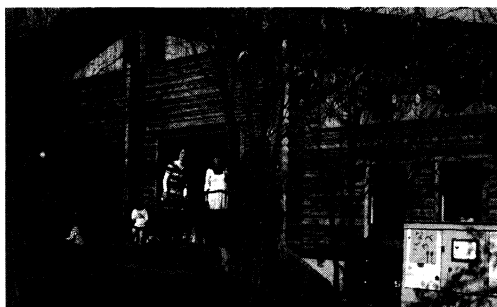
何日もかけて作ったという。橋のたもとは作者の名が豪快に記された立札が立っていた。

レンガを積み始めた子どもたちがいた。慣れた手つきでかまどを作っていく。ここでは、いつでも火をおこすことができる。火を見つめる子どもたちの表情が柔らかない。家から持ってきた



ものを焼いて食べたり、濡れた服を乾かしたり、子どもたちは火を自在に活用している。

### ◆ログハウスにはお母さんたちと 小さな子どもたち



広場の奥にあるログハウスには、たくさんの乳幼児親子が集まっていた。

ゆったりと話をしていたり、広場に出て遊びだしたり、かまどで火をおこしたりする親子もいる。スタッフと一緒に泥んこになって遊びだした子どもたちは元気いっぱい。そんな子どもたちをお母

さんたちが笑いながら見ている。冬とは思えない暖かな日差しの下で、ゆっくり過ごしている姿が印象的だった。

「小さい子どもとお母さんの利用はとても多いですよ」と話す西野さんに、大人たちに対してどのようにかかわっているのかを聞いてみた。

「大人もやりたいという思いを抱いている、その気持ちをまず受け止めようと思っっている。その上で、目の前の子どもや子どもたちの時間をしっかり見ようよと伝えている。子どもが遊ぶのを見てハラハラしている親に話しかけていくのもスタッフの役割だと思う。親たちの中に大丈夫！という思いを増やしていきたい」という答えが返ってきた。

子ども夢パークが大切にしている「自由に遊べるように」「新しい仲間と出会えるように」「だれもが自分らしくいられるように」という3つのこと。それは、年齢を超えて大切にされて



いることなのではないだろうか。夢パークで過ごす中で、大人たちもまた、自由に過ごし仲間と出会い、自分らしく過ごす時間ももてる。そのこの意味はとても大きいと感じる。

### ◆少しずつ重なりながら自分の時間を過ごす

子ども夢パークの敷地内には、プレーパークと建物がある。建物の中には、全天候広場『たいよう』、スタジオ、交流スペース『ごろり』、乳幼児や障がい者優先の部屋『ゆるり』、フリースペース『えん』がある。そして、子ども夢パーク全体を、緩やかな道がぐるりと取り囲んでいる。

その道を、三輪車や自転車に乗った小学生が走り抜けていく。さつきから何周年たちが、広場に風をおこしていく。



朝九時から夜九時まで開いているこの場所では、メンバートレーニングが緩やかに行われている。午後、小中学生が遊びにやってくるころ、乳幼児親子はベビーカーを押して帰り始める。夢パークを居場所にしてている人たちは、少しずつ重なりながら自分たちの時間をここでつくっている。

同じことは、小学生と中学生にもいえる。屋根のある全天候広場『たいよう』でスポーツを楽しんでいる中学生。その様子を、そばの横木に座って小学生が見ている。さつきまで、あの場所でサッカーをしていた少年たちだ。そろそろ中学生のお兄さんたちが集まってくる……という気配を敏感に察知した小学生は、場を譲り渡していく。そして中学生たちがバスケットボールをしている様子を眺

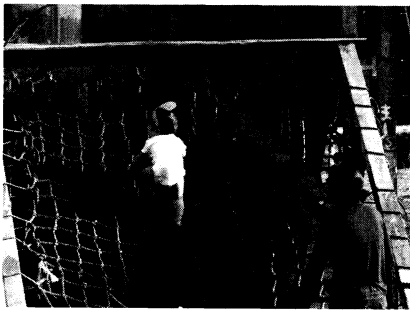




めている。その背中には少しだけ悲哀がにじみ、いとおいしい気持ちになる。子どもたちも大人も、少しずつ重なりながら自分たちの居心地のいい時間をここで過ごしている。

子ども夢パークとは「やってみよう」がいっぱいある場所。

子ども夢パークにあるもの、それは、土と水と火。子どもたちが作り出した家や橋、不思議な道具の数々、自由に使える工具、板切れや角材。上へ上へと向かっていくやぐらと深い闇へと進んでいく長いトンネル。子ども夢パークにいる「なかま」は、さまざまなお子様たち、大人たち、そしてスタッフ。「この場所が目指しているのは、完成のない場作りです。いろんな人が集えることの良さを大切にしたい。作り続けること、止まらないこと、隙間がいっぱいあるってことがいいですよね」と笑顔で語る西野さんと最後に握手をした。



西野さんの手は、大きくて分厚い手だった。子ども「いのち」をいつも真ん中において、たくさんの仲間と今をつくりだしている人の力強く温かい手だった。

訪問者／伊集院・小川・川辺・佐藤・高橋・宮里  
文／宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

— 訪問メモ —

訪問時期：2010年12月  
訪問場所：川崎市子ども夢パーク  
〔創立〕2003（平成15）年  
〔住所〕川崎市高津区下作延5-30-1  
〔電話〕044-811-2001  
<http://www.yumepark.net>